

# 宇宙玩具『踊るサテュロス』についての覚書

## The Note of TACO “Dancing Satyr”

角 田 達 朗  
Tatsuo SUMIDA

2015年9月、筆者を代表とする演劇企画集団・宇宙玩具（TACO）は『踊るサテュロス』と題する公演を行った。この公演は「演劇創作作品の上演における表現方法の研究」という研究課題を掲げて本学の研究助成を受けた。

＊

この公演は、1995年にオウム真理教が起こした地下鉄サリン事件とこれに続く教団幹部逮捕から20周年を迎えるのを受けて、このような反社会的カルト集団がどのようにして成立するかを演劇的アプローチによって描き出そうと試みたものである。公演時に受付で配布するパンフレットに、筆者は以下のように書いた。

かつて地下鉄サリン事件が起こり、その騒然とした被害現場の映像が繰り返し放送されていた頃、自分が電車に乗るたびに、そこに毒ガスを撒かれるところが脳裏に浮かんで恐怖を感じた。その反面、自分が毒ガスを撒いて人を無差別に殺すところは想像がつかなかった。

自分は“あちら側”の人間ではないのだ。その時そう思った。

あれから20年がたち、いくつも特集番組が放送された。予想どおり、その多くは被害者と捜査関係者への取材を軸にして作られていた。報道はやはりここでも、視聴者の受け入れやすい情報を優先したのだった。

現実には被害と加害はしばしば錯綜する。サリン事件の実行犯たちにしても、多くはマインド・コントロールの被害者でもあるのだが……

あの頃想像できなかったことを、今こそ想像してみなければならぬと思う。

当時、私の周囲にも何人かオウム信者がいた。いささか風変わりではあったけれど、決して常軌を逸してはいなかった、あの人たち。“あちら側”に行こうとしたのは、なぜ彼等だったのか？なぜ私ではなかったのか？

そして今、私がいる所は、本当に“こちら側”なのか？

事件当時、マスメディアは教団幹部に有名大学の出身者が数多くいたことを「エリートの転落」というようなセンセーショナルな語り口でしばしば取り沙汰していた。そうした報道からは、宗教に走る者はたいてい人生の落伍者であるというような偏見が透けて見えたものである。そうした偏見を取り払って事態を平明に見るならば、教団幹部の多くは平穏な市民生活を送ることが可能であ

るはずの人々だった、ということになるであろう。つまるところ、オウム事件においては、被害と加害の境界のみならず、普通と特殊の境界も霞んでいたのだった。そしてそれは、実際には多くの犯罪にも、更には一般に悪と見なされる事象の多くにも共通することなのかもしれない。

\*

劇の梗概を示そう。

ディオニュソス演劇学校で一週間の夏期集中講座が始まる。講師陣の中で抜群の人気を誇るのは、世界的な演劇の祭典として知られるプロミオス演劇祭でかつて最優秀賞を受賞した特任講師である。その講座を受講するのは、女子生徒3名、男子生徒1名の計4名。

この講師はその輝かしい経歴を背景に、「君たちの中に僕の眼鏡に合う者がいたら、ともにプロミオスを目指そうと思う」と宣言し、講座開始早々から生徒たちの心をつかむ。そして、講師が自ら大胆に意識したという『心訳 ロミオとジュリエット』（以下、『心訳』と略す）による演技実習が始まると、生徒たちを時にほめ上げ時にこき下ろして意のままに操り、競争心と神秘主義的な演劇論を植え付けていく。また、『心訳』には原作以上に性的モチーフが横溢していて、これによる稽古を重ねることで、生徒たちは無意識のうちに性への羞恥心・警戒心を解除されていく。さらに、講師は自分の指導方針が校長に批判されていると告げて、生徒たちに学校への反感も植え付けていく。

講座2日目。死んだロミオの役を演じた男子生徒が「本当に死んでるわけじゃない。死んだふりをしているだけだ。」と口を滑らせたのを、講師は聞き咎め、授業後男子生徒に自分と一対一で「特訓」を受けさせる。その内実は、偽薬を用いて死の苦痛と恐怖を疑似体験させるものだった。

その翌日、「特訓」の目覚ましい成果を見せられた女子生徒たちは、自分も「特訓」を受けたいと熱望する。講師は「絶対に他言しないこと」を条件にそれに応じ、その日に女子生徒の一人を、さらにその翌日に別の一人を「特訓」する。

講座5日目、授業前に『心訳』の自主稽古をしている時、男子生徒は女子生徒たちの稽古に臨む姿勢を咎め、講師と女子生徒たちの関係が一線を超えているのではないかと疑う。すると、そこに講師が駆けつけ、校長に「生徒への指導が厳しすぎる」とクレームを付けられたと告げる。生徒たちは憤って「退学」を口にするが、講師は「卒業はするように」となだめる。そして、女子生徒たちが男子生徒に疑われたことを話すと、講師は「男子生徒は『心訳』に登場するゲスな男たちになりきったのだ」と、男子生徒をほめ上げる。

その日の授業後、三人目の女子生徒が「特訓」を受ける。その実態は、役作りに偽装した性的関係の要求だった。翌日の授業前に、講師は校長室に呼び出され、女子生徒との不適切な関係の動かぬ証拠を突き付けられ罷免される。

講師はそのまま立ち去ると見せかけて実習室に行き、生徒たちに「校長が君たちを侮辱したから、辞表を叩きつけてやった」と告げる。激昂した生徒たちは講師とともに劇団を結成し、学校を見返すことを誓う。

舞台を学校に設定したのは、カリスマによるマインド・コントロールというカルト的事象はある種の新興宗教団体に特有のものではなく、私たちの社会生活の様々な局面、例えば企業でも、あるいは教育現場でも起こり得ると考えるからである。演劇学校としたのは、演劇界において「役になりきること」を善しとする前提で展開される一種精神主義的な演技論に、カルトに通ずる危うさを感じるからである。

\*

劇中、マインド・コントロールの手口ならびに過程について、およそ以下のように描写した。

まず講師は自らの演劇論を以下のように語る。

「舞台の上は戦場なんだ。観客は常に食欲だ。もっと面白いものを、もっと心揺さぶるものを。僕たち俳優は、その食欲な眼差しの一斉掃射を全身に浴びながら、真の栄光を勝ち取らなければならない。俳優の仕事は、血みどろの戦いなんだ」

「俳優の仕事は常在戦場。君たちが本気で俳優を志しているなら、常にその自覚を持っていたまえ」「舞台という戦場で、俳優の武器は二つある。その二つとは謙虚と大胆。その二つがあれば、演技力は自ずとついてくる。その二つがなければ、どんなに演技力があっても、ただ小器用なだけだ」こうした言説は、意味内容に限って見ればそれなりの妥当性がある。一面の真理と言ってもよいであろう。しかし、「戦場」「一斉掃射」「血みどろの戦い」「武器」という一連の修辭は穏やかではない。意味内容が理に適っているがゆえに生徒たちはこれを信じるが、同時に、穏やかならざる修辭によって俳優の仕事に対する好戦的な高揚感と、それと裏腹の不安感という相反するものを刷り込まれていく。これが講師によるマインド・コントロールの第一段階である。

第二の段階は演技に臨む姿勢への攻撃という形を取る。講師は『心訳』冒頭の卑猥な言辭が横溢する場面を演じさせた後、次のように言い放つ。

「さっき言ったはずだ。演劇は真実の世界だ、と。しかし、君たちの演技には全く真実が宿っていなかった」

「君たちは今の場面を、ただそれらしく演じようとしかしていなかった。テレビやマンガに出てくる下品なならず者。そんな、その辺にゴロゴロ転がっているお手軽なイメージを真似して、ただそれっぽく装っただけだ。そんなものは所詮借り物。かけら程の真実もない」

「役を演じるとは、その役のすべてを自分の身に引き受けることだ」

「君たちは一度でも、この男たちの下劣さを自分の身に引き受けることを思い浮かべて台本を読んだらどうか。……もし考えもしなかったのなら、それこそ俳優としての想像力の欠如だ。どんな役でも、与えられれば演じ切る。そういう気概もないということだからね」

これらの発言は生徒たちの演技を全否定するものであるが、やはり意味内容には妥当性がある。だからこそ、生徒たちは反論しづらい。生徒たちにしてみれば未熟なりに懸命に手探りして演じたのだが、未熟の自覚があるからこそ、なおさら反論しづらい。そうしてやすやすと自信を打ち砕かれ、先程の高揚感から一転して、自分には俳優の仕事は勤まらないのではないかという深い不安の中に突き落とされることになる。

講師は更に続ける。

『ロミジュリ』にはキス・シーンもあればベッド・シーンもあるからね。それで、手初めにこの場面をやって、羞恥心を克服してもらおうと思ったんだが、それ以前の問題だった。どうやら、いきなりこの場面をやらせたのが間違いだったようだ」

この発言は、性的羞恥心はたやすく克服できるはずのものだという前提に立っている。自信を打ち砕かれて打ちひしがれている生徒たちは、この発言によって、性的羞恥心も克服できないようでは俳優の仕事は勤まらないのだと思い込まれる。これは生徒たちを性的関係に引き込むための手口なのだが、もっともらしく装われた言辞ゆえに、生徒たちはそれと気づかない。

この劇がこのような性的モチーフを含むのは、言うまでもなく、カルト的な宗教団体において男性の教祖と複数の（時として「不特定」とも言えるほどの）女性信者が性的関係を持つことがよくあるからである。ちなみに女性信者側の動機としては、集団において指導的地位にある者と密な関係を結ぶことで自らのステイタスを上昇させようとする社会的欲求と、自らの遺伝子を優良な遺伝子と結合させようとする生殖の本能とが分かち難く混淆しているであろう。そこには少なくとも形式上は合意が存在する。性的自己決定権という観点からすれば、一概に悪事と決めつけるのは早計であるように見える。しかし、もしもカリスマ性なるものが作為的に演出されたものであり、かつ、カリスマとの性的な結び付きを望む心情も作為的に誘導されたものであるとすれば、理性的な判断能力を低下させるような作為が張り巡らされていたということであるから、そこに自覚されざる被害が存在することになる。したがって、そのような演出・誘導は悪である。

さて、講師は生徒たちの演技を全否定して自信を打ち砕いた後に、「俳優どうし、息を合わせるためのトレーニングをしよう」と提案をする。マインド・コントロールの第三段階である。

「呼吸は言わば生命の根源。そして演技の土台」

「どんな会話でも、あるいは闘いでも、俳優どうしの息が合わなければ台無しになってしまう。俳優どうしの揺るぎなく調和した呼吸が、芝居に命を吹き込むんだ」

生徒たちは講師に言われるままに輪になって、息でキャッチボールするトレーニングを行う。詳しい説明は省略するが、これは実際の演技の基礎訓練の一つとしてよく行われているものである。生徒たちが息でキャッチボールをしている最中、講師は「もっと速く」「もっと速く」とけしかけ、限界まで加速させる。生徒たちは異様な高揚感に包まれ、理性的な判断能力を失っていく。そうした中、講師は頃合いを見計らっては「もっと深く、体の芯から息を吐いて」「生命の根源を全員で共有するんだ」「みんなで一つのイノチになる」と声をかけていく。理性の空隙を突いて、一種神秘主義的な演技論を刷り込んでいくのである。

かくしてマインド・コントロールはいよいよ仕上げの段階に入る。このトレーニングを見届けた講師は、一人の女子生徒を誉めそやす。

「君は変わりたいと思ってこの学校に入り、この講座を選んだ。そして今、君は照れや恥じらいという古い殻を脱ぎ捨て、新しい君に生まれ変わることができたんだ。おめでとう。心から祝福するよ」

このように特定の一人を称揚することによって競争心を煽った後、講師はこう言って全員を讃える。

「君たちは全員で息を合わせ、一つの息遣いを共有し、まさしく一つのイノチになっていた。本当に素晴らしかった」

大仰な賞賛に驚いた生徒たちが「でも、私はそんなこと全然意識していませんでした」「私もそうです。たまたま運よく出来ただけなんじゃ……」と疑問を呈すると、講師はこう答える。

「いや、そうではない。大事なことが無意識のうちに出来るのが、本当の才能なんだ。間違いない。君たちは本物の才能の持ち主だよ」

つい先程、自信を打ち砕かれ深い不安の中に沈んでいた生徒たちは、この言葉によって全面的な承認が得られたと感じ、講師に全幅の信頼を寄せるようになる。その信頼は、自らの意識などは取るに足らない浅薄なものだという刷り込みと一体のものである。

ここに至って、マインド・コントロールのベースは完成する。後は拍車をかけていくのみである。「演劇は真実の世界。現実の世界とは異なる、独自の摂理があるんだ」

「古代ギリシアの神デュオニュソスは、葡萄と葡萄酒、豊饒と享楽、狂乱と陶酔、そして演劇の神である。デュオニュソスの信者たちは、ほとんど女ばかりだったが、夜な夜な森の中に集まって葡萄酒を酌み交わし、デュオニュソスを讃えるディテュランボスという歌を歌い踊って神がかりをした。デュオニュソスに神がかりした女たちは、熱狂のままに森を駆け抜け、険しい山も楽々と踏み越え、素手でライオンを倒したと言われている」

「ライオンとは舞台という戦場のこと。しかし、神がかりしてデュオニュソスと一体になれば百人力、というわけなんだ」

「ちっぽけな自意識を捨てて自分を空っぽにすることで、俳優は自分という存在の殻を破り、自由自在に羽ばたくことができる。そうすれば、あたかも神に操られる人形のように、自然に役になりきることができるんだ」

「君たちは実にデュオニュソスの名にふさわしい若者たちだ。きっと神がかり的な進歩を見せてくれることだろう。楽しみだよ」

「デュオニュソスの宗教は権力に目を付けられた。女たちが夜な夜な家を抜け出し、快楽に耽って神がかりするなんて、男たちからしたら、全くもって穏やかではないからね。相当な弾圧も受けたらしい」

「弾圧しても弾圧しても、デュオニュソスの宗教は衰えなかった。それで権力は妥協に転じたんだ。デュオニュソスを正式に神として認めるかわりに、ディテュランボスにストーリーを持たせ、男が演じることにした。演劇はそうやって成立したと考えられている」

「だけど、束縛からの解放を求めるという方向性は、現代の演劇までずっと受け継がれている。役になりきるっていうのは、役者が自我という制約を超越することだから、神がかりに通じるものなんだ」

「大丈夫。君たちならきっとそこまで行ける。僕を信じてついてくればいいんだ」

こうした言説は必ずしもマインド・コントロールの具として用意されたわけではない。講師自身が俳優として経験を積み重ねる中で体得したことをベースにしているであろうし、その中にはいくばくかの真理も含まれていることであろう。また、デュオニュソスについて語るくぐりや演劇史研究の成果を踏まえている。そうした裏打ちが説得力を補強しているのである。言説そのものに正当性があったとしても、それを不当な目的の下に悪用することは可能というわけである。

正当性とはまた別に、主観的要素としてマインド・コントロールを促進しているのは、神秘性であり崇高性である。神秘とは換言すれば測り知れぬものであり、それゆえに実在するとも不在であるとも客観的には定め難いものであるが、だからこそ、実在すると信じる者を魅了してやまない。

生徒たちがディオニュソス演劇学校に入学し人気講師の集中講座を受講した理由は、俳優として成功したいからであったり、消極的な自分を変えたいからであったりと個人差はあるが、総じて世俗的と言える範囲に収まっていた。それが講師から演劇に神秘的な領域があることを指し示されることにより、個々人の世俗的目的を超えて何か崇高なものに接続しているかのように認識を改める。

そして、デュオニュソスの宗教と権力との葛藤を語るくぐりでは、権力への反感を抱くよう促されるのである。言うまでもなく、権力に対して批判的な意識を保持することは必要なことであり、決して悪いことではない。しかし、講師はそれすらもマインド・コントロールを強化する材料として利用していく。そして、そのことがこの講師と生徒たちのカルト的關係を反社会化させる契機となるのである。

\*

劇中、講師が生徒たちとのカルト的關係を反社会化させる手口ならびに過程について、およそ以下のように描写した。この劇は、カルト集団の形成という社会的現象を演劇学校の中での出来事として描くものであるから、反社会化も反学校化として描かれる。

講座1日目の終了時、講師は生徒たちに以下のように告げる。

「みんな、初回から計画通りに行かなくて、申し訳ない（と言って深々と頭を下げる）」

「言っただろう、演劇は真実の世界。現実の世界とは異なる、独自の摂理があるんだ。……でも、悲しいかな、ここは現実の世界。学校から『ちゃんと授業計画の通りにやれ』って、うるさく言われてるんでね」

「授業計画は事前に公表して、それで受講者の募集もしてるだろ？ だから、学校に言わせれば、授業計画は受講者との約束ってことになるんだよ。『教師たる者、生徒との約束を破るとは何事か』ってね」

このように語るにより、学校は規則にばかり拘泥する硬直した教条主義の組織であり、演劇の「真実」を学ぶ場としてふさわしくないかのような印象を刷り込むのである。これに対し、生徒たちは

「それなら、何の問題もないはずですよ。私たちはみんな今日の授業に満足してるんですから」

「そんな、受講者が決まる前の計画なんかより、今こうして受講してる私たちを見て、私たちのために考えてくれることの方が、ずっとずっと意味のあることじゃないですか」

などと講師を擁護し、講師はこれに応じて

「そうかい。それじゃあ、君たちの言葉に甘えさせてもらうよ。僕だって、学校のためにこの講座をやってるわけじゃない。君たちのためにやってるんだ。だから、このことはここだけの秘密にしよう。君たちに余計なとぼっちりがかかってはいけなからね」

と言い聞かせ、生徒たちと共犯関係を結ぶとともに、自分の講座を精神的な密室に仕立て上げる。

講座3日目。前日に男子生徒が受けた「特訓」の著しい成果を見た女子生徒たちが口々に「自分も特訓を受けたい」と言うと、講師は以下のように言う。

「実は今朝、校長がわざわざ控室まで来てね。『生徒と一対一で稽古をつけるのはやめてくれ』って言われてしまったんだ」

『一対一の稽古はプライベートなレッスンであって、この学校の教育活動としては認められない』って言うんだよ」

「もちろん反論したよ。でも、校長は『ダメなものはダメ』の一点張りだね」

「たぶん、ほかのクラスからクレームがついたんだろうね。『僕のクラスだけ個人指導するのは不公平だ』とかなんとか。校長が『公平性の確保』とか言ってたからね」

「僕のやり方はこの学校の方針には合わないみたいだ。これ以上学校に目を付けられると、君たちにまで肩身の狭い思いをさせてしまう。仕方がない。自粛するよ」

これを聞いた生徒たちは校長の杓子定期的な対応に憤り、誰が特訓のことを他のクラスに漏らしたのかと犯人捜しを始める。講師は「個人特訓のことは秘密にするつもりじゃなかったから、いいんだよ」と心にも無いことを言ってなだめ、生徒たちが特訓を懇願すると、こう言う。

「……君たちの気持ちはよくわかった。その熱情はまさしくデュオニュソスの信者そのものだ。ぜひとも君たちの期待に応えたいとは思いますが……一つ約束してもらえないかな？ この講座でどんなことをしているか、絶対に他所でしゃべらないでほしいんだ。わかるよね？」

予め誘導された通り、生徒たちは口々に約束するのである。

講座5日目の授業前の自主稽古の際、男子生徒が女子生徒たちと講師の関係を疑うと、実にタイミングよく講師が駆けつける。（これは講師が生徒たちの会話を盗聴しているからであるが、それが明らかになるのはその翌日である。）講師は生徒たちに以下のように言う。

「また校長に捕まってね。『生徒への指導が厳しすぎるんじゃないか』って注意されたんだ。こうも立て続けに校長からクレームがつくなんて」

『厳しくするのはダメ』の一点張りだったよ」

『今時の生徒は厳しくすると、すぐに本人か親からクレームが出る』ってさ」

「僕もね、校長に言ってやったんだ。『僕の指導が厳しすぎるどころか、生徒たちは自主稽古もしてるんですよ。とても意欲的な生徒たちなんです』って。そしたら校長は何て言ったと思う？」

『君の指導は君の指導。自主稽古は自主稽古。その間の因果関係は証明不可能だろう』だとさ」

「ここはもう演劇学校なんかじゃない。何でもかんでも無難に事務的に処理したがるお役所だ」

これは自分の行いに疑いをかけられるという事態を収束させ、かつカルト的結束を強化するため

の作為の一環であって、校長にクレームをつけられたというのは事実ではない。この箇所に限らず、上述の、講師が校長について語るくだりはすべて捏造である。（このこともこの翌日に明らかになる。）そもそも講師が学校や校長に対する嫌悪を掻き立てるのは、生徒たちを反学校化させることそのものが目的なのではない。学校に対する不信感が募るほど、生徒たちは講師の言うことだけを信じ、講師の言いなりになっていく。それが目的なのである。現実にカルト集団が反社会化するのも、多くの場合このような要因によるものと思われる。言わば、マインド・コントロールの補完要素として反社会性を導入するのである。だから、生徒たちが「この学校の生徒であることが恥ずかしい」と言い出して学校を中退しようとする、講師は

「それはダメだ。演劇学校出身という学歴は、演劇界では結構評価されるんだ。みんながこの先、演劇の世界で生きていくなら、こんな学校でも卒業はしておいた方がいい」

「君たちのことを本当に大事に思っているからこそ、将来のことを考えるとね」

などとなだめて思い止どまらせる。この時点では、講師は学校と事を構えるつもりはない。そんなことをしても、自分の言いなりになる関係を維持するうえで特段の利点は生じないからである。彼が反学校的な言説を弄するのは、関係の結束力と閉鎖性を高めるための方便に過ぎない。

講座6日目になって、講師は本当に校長に呼び付けられて悪事の証拠を突き付けられ、学校を去ることを余儀なくされる。講師が生徒たちとの関係を本質的に反学校化させるのを決断するのは、この時である。生徒たちを学校から分断してしまわなければ、自分の言いなりになる関係を維持できない状況に追い込まれたからである。

マインド・コントロールをかける側の動機は、自分が唯一絶対の存在として尊崇される関係を構築し維持することによって、支配欲を満たし全能感に浸ることであると、筆者は考えたのである。

それでは、マインド・コントロールにかかってしまう側には、何かそうなるべき理由が存在するのであろうか。この劇では、俳優として成功したいという世俗的願望や、消極的な自分を変えたいという変身願望として描いた。しかし、より普遍的な理由があるとすれば、それは唯一絶対の存在によって承認されることによって、自分の存在理由が確固たるものになるという感覚であろう。もちろんそれは錯覚に過ぎないのであるが、それよりも重要なことは、それが人が誰しも大なり小なり抱えているであろう〈存在の不安〉に根差すということである。個として存在することそのものに漠たる不安が付きまとうからこそ、唯一絶対の存在によって承認されることに安心を求めてしまうわけである。その点に関しては、もう少し掘り下げて描く余地があったかもしれないと思う。

＊

この劇の演劇的な特徴としては、『心訳』の稽古を劇中劇として含んでいることが挙げられる。一般に、このような二重構造の劇においては、演技をしているという演技と演技をしていないという演技の演じ分けが求められる。この劇ももちろん同様であるが、そればかりでない。上述のように『心訳』とそれを用いての稽古には、女子生徒たちの性に対する羞恥心・警戒心を解除しようとする講師の作為が潜んでいて、そしてその通りに女子生徒たちは不適切な関係へといざなわれていく。したがって、生徒たちを演じる俳優たちは演技をしていないという演技において、しだいに羞

恥心・警戒心が解除されていくという変化も演じなければならないのである。

自ら脚本を書き演出した舞台において、その意図した所がどの程度実現したかを客観的に評価するのはすこぶる難しいことである。ここにはただ、筆者は俳優たちの適応能力の高さに感嘆したとだけ記しておこう。